

2022年2月 20 日 降誕節第 9 主日礼拝

メッセージ「中東リベンジャーズ」

岡嶋千宙伝道師

聖書 創世記 45章 3-15 節

普段とは変わったことが起こると、驚きます。焦ります。身構えます。当然と思っていたことが起こらない。あるいは当然と思っていたこととは全く異なることが起こる。影響を小さく押さえ込めれば良いのですが、大きくて、広範囲にその影響が及ぶ場合にはそうはいきません。ここ 2、3 年、日本のみならず、世界中で人々の日常に大きな影響を与えているものと言え、もちろん新型コロナウイルス。2019 年の終わりから少しずつ感染が報告されるようになり、次の年 2020 年になって、世界中に感染が拡大していきました。それから 2 年経った今でも、感染拡大の勢いは収まっていません。人類がこれまでに知っていたものとは異なる特徴を持つこのウイルスは、強い感染力と生存力を持ち、感染した人を死に至らせることもあり、わたしたちの日常を大きく揺さぶる存在となっています。日常や普段に影響を及ぼすのは出来事や物事だけではありません。人、である場合もあります。社会の多数の構成員が「当然」「常識」と思うこととは異なる価値観を持つ人、その価値を体現する人。「変わった人」、「厄介者」、「トラブルメーカー」。そんな人たちは、社会や共同体の秩序を乱すものとして煙たがれます。多数の側は、なるべく、そんな人たちと関わらないように、距離を取ろうとします。秩序が著しく乱れるおそれがあるときには、そんな人たちを、自分たちの生活環境から遠ざけて、排除しようとするこどだってあります。

創世記 45 章 3-15 節。先ほどお読みいただいた本日の御言葉。登場するのはヨセフと、その兄弟たち。ここには記されていませんが、「兄弟たち」というのは 11 人。なので、ヨセフをいれて全部で 12 人兄弟なのですが、20 数年にわたり、ヨセフだけが残りの 11 人とは別のところで生きていました。約四半世紀ぶりに、離ればなれになっていた兄弟たちが再会するという場面。その場面を詳しく見ていく前に、時間を遡ります。そもそも、なぜヨセフは兄弟たちと離ればなれになったのか。それは、ヨセフが家から追い出されたからです。そして、ヨセフが追い出されたのは、彼が「変わり者」だったからです。家族にとって、とくに兄たちにとってヨセフは

厄介者。当時の、兄たちの思いが聖書に記されています。「ヨセフを憎んでいた」（創 37:4-5）。肉親から憎まれるほどの変わり者、ということで、逆に興味が持てるのですが、では、どう変わっていたのかと言うと、聖書に記されているところによれば、まずは口が軽くて、何でも告げ口する（37 章 2 節）。次に、兄たちを差し置いて一番に父親に愛される（37 章 3 節）。さらに、自分が見た夢の話として、兄たちや両親を侮辱する内容のことを平気で言う（37 章 5-11 節）。

これだけでもなかなか厄介者ですが、まだあります。明示されてはいませんが、聖書の記述から示唆されるところによると、出で立ち、容姿も変わっていたようです。37 章 3 節、父親に愛されていたヨセフは、父から「長袖の上着」をもらってそれを着ていました。新共同訳では「裾の長い晴れ着」と訳されていて、具体的にどんな服だったのかはわからないのですが、聖書の中で、この服を着ていたとされる人物がもう一人います。サムエル記下 13 章 18 節。ダビデの娘タマルが、「王女で処女である」女性が着ることになっている衣装として、この「長袖の上着」（新共同訳では「飾り付きの上着」）を着ていたと言われています。ヨセフの外見に関して、もう一つ、気になる記述があります。39 章 6 節。これは、ヨセフが家を追い出されてエジプトに移り住んでからのことなのですが、ヨセフは「顔も美しく体つきも優れていた」と描写されています。男性で、ここまで容姿について言われている人物はめずらしく、これと全く同じ表現が、ヨセフの母ラケルに対して用いられているのです（創 29 章 17 節）。生物学的には、ヨセフは男性だったのでしょう。ですが、出で立ち、容姿（現代で言うところのジェンダー表現）については、女性っぽさを有していたのではないのでしょうか。兄たちが、当時の家父長制度の男性優位社会において「男らしく」ないヨセフを嫌っていた、と言うことは十分にあり得ます。口が軽くて、自分たちを侮辱するようなことを平気でいい、男らしさの欠片もなく女々しくて、それなのに父親には一番に愛されている弟ヨセフ。自分たちが大切にしている価値観には相容れない存在。家族の平和な生活を崩しかねない存在。兄たちはそんなヨセフを疎ましく思って、家から追い出したのです。

それから 20 年以上を経て、兄弟再会のとき。この場面に先立ち、二度、ヨセフは兄たちと対面しているのですが、そのときは、エジプトの役人、国家の行政を司る

責任者として接しています。彼は、エジプトに来てからエジプト人の名前を与えられていて(41章 45節)、その名前で、エジプト人として、兄たちの前に立ったのでしょう。最初の対面の時点で、ヨセフはすでに彼らが自分の兄たちであることに気づいていましたが、自分が弟であることは明かしていません。他方の兄たちは、自分たちの前に立つ人が血を分けた弟ヨセフであるとは気づいていませんでした。今日の聖書箇所この場面で、ヨセフは、自分の正体を明かすのです。3節「私はヨセフです。」エジプトに来てから与えられた名前ではなく、故郷カナンで生まれたときに付けられた名前。エジプトでその名前を知っている人はほとんどいなかったことでしょう。ヨセフと共に同じ生活環境で生きたことのある者だからこそ分かるその名前を、兄たちの耳に届け入れたヨセフ。そして、続けて、「父はまだ生きていますか。」この質問をヨセフが投げ掛けるのはこれで3度目。日本語では分かりにくいのですが、前の二回では「あなたたちの父は」となっているのに対して、この場面では「私の父は」となっています。兄たちの父親は、ヨセフにとっても父親。同じ父親を持つ者として、自分と兄たちは共に生きた過去を持つ。兄たちは「驚きのあまり答えることができなかった。」当然でしょう。彼らにとって、ヨセフは自分たちの生活空間からとっくの昔に消えた存在です。いなくなった人。今はいない人。彼らの世界では、死んだも同然。そのヨセフが目の前に現れて、エジプト人の格好をして、エジプトの役人として、語りかけている。そして、「自分はヨセフだ」と伝えている。弟は死んではいなかった。兄たちにとっては遠い過去に置いてきた、ヨセフと過ごしたカナンでの日々。そして、とっくに忘れていたヨセフを追い出したあの日の出来事。でも、ヨセフにとっては、決して忘れられないその日々、その日です。家から追い出されたという記憶は、今も生々しく、今でもうずく生身の傷として深く刻み込まれたものでした。まるで昨日のことのよう思い起こされる記憶。だからもう一度。4節「私はあなたがたがエジプトへ売った弟のヨセフです」。今度は、名前だけではなく、過去の記憶を含めて。過去を語ることは痛みを伴うものであったはずですが、それでも、語る。自分の今の姿を、兄たちとの関わりの中に位置付けるために。一方は、カナンの地に住む遊牧民の家族として、他方はエジプトの地に住む王国の役人として、それぞれバラバラに紡いできた別々の歴史を、ヨセフを含めた兄弟の、家族の歴史として紡ぎ直そうとするのです。

その上で、ヨセフは、未来への歩みを描いて兄たちに示します。9 節「父に言ってください。私のところに来るように。」13 節「父をここへ連れてきてください。」10 節「あなたも、息子も、孫も…すべてのものが私の近くで暮らせるように。」ヨセフは知っていました。同質性が保たれていて不確定要素が少なく、平穏で安定した世界も、他方で、多様性に溢れ「異なること」が排除ではなく強みとして活かされる世界も、どちらもそれぞれに綻びがあることを。どちらか一方だけでは十分ではなく、片方だけの環境では、そこに生きる人たちの命が蝕まれるおそれがあることを。近親同族に囲まれた故郷カナンで、「変わり者」として扱われ、もっとも近い家族から嫌われて追い出された経験と痛みを持つヨセフ。同時に、多様性が認められ、異なることが強みとして活かされる地エジプトで、故郷では味わうことのできなかった解放の喜びを感じながらも、そこで生きるために、ユダヤの民ヨセフとしてではなく、エジプトの名前を持ったエジプトの役人としての仮面をかぶり続けなければならないことの息苦しさを感じていたヨセフ。排除された者として、変わり者として、よそ者としての経験と、その経験からの痛みや苦しみや不自由さを知っているヨセフだからこそ、口にすることのできた未来への提案。この場面を含めて、エジプトにいるヨセフと、カナンにいる兄弟、父、家族とのやりとりを描いた 42 章から 46 章の記事において、繰り返し使われている言葉があります。「生きる」、または「生きている」。本日の箇所だけでも、先ほど見た 3 節の他に、5 節と 7 節で「生きる」という言葉が使われています。この言葉に映し出されるヨセフの思い。「わたしは生きている。あなたも生きている。わたしは願う。わたしとあなたが、これからは共に生きていくことを。」ヨセフの兄弟たちと父は、その思いを受け止め、共に生きることを選択しました。この場面のあと、兄たちがいったんヨセフのもとを離れて、故郷にいる父を呼び寄せるためにカナンへ戻るのですが、そこで、兄たちは父ヤコブに伝えます。「ヨセフはまだ生きています」（45 章 25 節）。そして、父ヤコブも答えます。「私の息子ヨセフがまだ生きている」（45 章 28 節）。異なりを持つヨセフを、その異なりを含めて、一人の人として生きる存在として、父と兄弟たちが初めて認めた瞬間。この瞬間から、ヨセフと家族とが再び共に歩む歴史が紡ぎ始められたのです。

年齢、学力、偏差値、収入、障害、性別、セクシュアリティ、民族、国籍、思想、主義。

様々な基準のもとで枠付けられている人と人との違い。違うこと、異なること。それ自体は決して良し悪しといった価値を伴うものではないはずなのに、いつからか、こっこの枠の中にいる人たちは「普通」「正常」とされ、その枠から外れる人たちが「特殊」「異常」とされていく。そして、次第に、「普通／正常」の側に入れられた人たちは、自分たちとは異なる「特殊／異常」な人たちを、社会の秩序を乱す脅威とみなし、排除するようになる。教会で。地域で。会社で。学校で。友達グループで。家庭で。あるいは自分自身の心の中で。繰り返し引き起こされる嫌悪と排除の現実。様々に張り巡らされた「普通／正常」の基準に合致しないと判断される「異なり」たちは、行き場を失い、居場所を失い、声を失い、ときに、命を失うこともあります。誰の目にも触れずに、誰にも気づかれずに。だけど、幸いにも生き延びた「異なり」たちは、それぞれが排除されて行き着いた先で、さらに自分とは異なる存在との出会いが与えられ、その存在との交わりを通して、異なりが間違いではないと気づかされます。そして、異なりが強みに変わり、異なりを持つもの同士が互いに違うからこそ共に生きていくことができる、そんな場が形成されていくこともあるのです。

ヨセフと同じように、「異なり」が理由で、厄介者として、社会で嫌われて排除された人がいます。ルカによる福音書の有名な放蕩息子のたとえ話（ルカ 15 章 11-32 節）。今、読み直してみると、放蕩息子として語られる一家の弟はヨセフと似たところがあります。ヨセフの場合のように、あからさまに家族から嫌われているわけではないけれども、この弟もまた、家族にとっての厄介者だったと言えるような気がします。父親が何の不平もなく、弟に、自分が死んでから渡すはずの財産を与えて国外に遊行することを許したというのは、それこそなかなか「普通」のこととしては考えられないからです。父を含めて、家族が弟の存在を煙たがっていた。密かに、いなくなることを期待していた。だとすると・・・。「弟は信仰者一人一人で、好き勝手に遊び呆けて散財したあとに帰ってきた彼を迎えた父は、わたしたちの罪を赦してくれる神様でありイエスである」という、教会でよく聞かれるような理解の仕方にはクエッションマークが付きまします。むしろ、この弟はヨセフであり、イエスであると捉える方がしっくりこないでしょうか。そして、その弟／イエスを迎え入れる父／兄は、信仰者一人一人の姿、ということになります。私たちとは全く異なるイエ

ス。異なるがゆえに、私たちのもとから取り除かれ、排除されたイエス。排除された結末として、十字架での死を迎えながらも、死を克服し、私たちのもとにもう一度来てくれているイエス。そのイエスが、語りかけます。「わたしは生きている。あなたも生きている。わたしは望む。あなたと共に生きることを。互いに、違いを持つ者同士、共に生きることを。」その語りかけをどう受け止め、どう生きていくのか。一人一人が今、問われています。